

## 文学部生になったら — 在学生に聞く —

田口 翔英  
(TAGUCHI Shohei 2年生)  
清風高校卒業



## 1週間の時間割

	月	火	水	木	金
1	芸術と文化 A	化学 A	現代の経済 B		博物館資料論
2	東洋史	日本史	哲学特殊講義	西洋史	社会学概論
3		西洋美術史	博物館経営論	中国語	美術史調査法
4		西洋美術史演習		日本美術史演習	美術史資料演習
5			日本国憲法 1		

2年生の前期になると、そろそろ教養科目は取り終える頃になります。僕は美術史専修なので、美術史の授業は必ず取ります。加えて学芸員資格と社会科の教員免許の授業も取っているのですが、取らなければいけない授業がたくさんあり、同級生と比べるとコマ数が多いほうです。

## ある1日の過ごし方

7:30 起床。大阪の実家から一時間半かけて通うので、一眼があるときは6時に起きます。でも今日の一眼はオンデマンドなので、授業は後回しにしてゆっくり寝ます。9時の電車に乗れば間に合うので、朝の支度が終わったら出発時間まで尺八を吹きます。

10:40 2限、哲学特殊講義。ソクラテスについての講義です。専修の授業ではありませんが、社会科の教員免許を取るには必要です。高校で習ったことを基本に分かりやすく解説して下さるので、哲学が少し苦手な僕でもきちんとついていきます。

12:10 美術史の研究室へ移動し、家から持参したお弁当を食べます。普段あまり食堂は利用しません。お弁当は年下のきょうだいのふんを作るついでに親が作ってくれますが、たまに自分で作ります。研究室にはいつも誰かがいて、同じ専修の先輩や同級生からいろいろと話を聞くことができますので、勉強になります。

13:20 3限、博物館経営論。学芸員の資格を取得するために必要な授業です。美術史専修の人は、学芸員を目指す場合でも学芸員関連の授業を取るようになっていきます。学芸員経験のある先生が、美術館を運営する側の視点からお話して下さるので、美術館に行った時の視点が変わります。

14:50 数少ない空きコマです。空き教室に友達が集まっているので、合流して一緒にしゃべります。授業が多いと寝るので、友達と過ごす時間が一番の心のオアシスです。この時間のうちに一眼のオンデマンドを受けておきます。

16:30 5限は鶴甲第一キャンパスで教職課程の授業を受けるので、文学部からみんまで移動します。日本国憲法の授業は内容が少し難しい場合があり、オンラインで配布されたレジュメにパソコンで書き込みをします。大学生になってから紙でノートを取ることが減りました。

18:30 5限終了。友達と駅まで下山し、同じ電車に乗る人たちと一緒に帰ります。電車の本数が朝より少ないので、帰りは20時半頃になります。

23:30 翌日の準備をして、就寝。

神戸大学文学部は2年生から専修に分かれるので、1年生のあいだはどの専修にするか悩むことができます。人文学全般に興味があり、専修を決めあげた私は各専修の先生に相談に行きました。先生方は学生に優しく接してくださり、いつも親身に話を聞いて下さるので、あまり緊張せず相談できます。一年生の前期にある各分野の入門の授業は、できる限り取っておくことをおすすめします。大学まで知らなかった学問でも、話を聞いてみると面白いと感じるかもしれません。また、文学部の先生をまとめて知ることができるチャンスでもあります。

文学部は、卒業だけを考えるなら時間割にはかなり余裕があり、バイトをはじめ自分の好きに合わせた様々な活動ができます。私は興味に合わせた授業を多めに取っています。教員免許の授業は大変ですが、共に頑張る文学部の友人がたくさんできるので楽しいです。友人たちとはよく中庭に集まって昼休みを一緒に過ごすのですが、友達や友達とどどんと集まってきて、だんだんと大きな集団になります。文学部は人数が少なく、大人集団でいけば通りますが同級生はたいして誰かの友達なので、ゆるやかに同級生みんとなつていけるところが神戸大学文学部の良いところです。

授業もたくさん取っていますが、私はバイトもしています。バイトは掛け持ちしていて、学校帰りに働いたり、休日を一日バイトに費やしたりしています。また、部活は邦楽部に所属していて、尺八を中心に和楽器をやっています。授業が少ない日は部室に一日中入り浸って練習しているのに加えて学外でも個人的に尺八を習っており、休日は和楽器の演奏会を部員と一緒に見に行くこともあります。勉強と合わせると普段の生活はかなり忙しくなりますが、充実した毎日を過ごしています。



白石 英里香  
(SHIRAISHI Erika 1年生)  
清風南海高校卒業

## 1週間の時間割

	月	火	水	木	金
1			Academic English Communication		初年次セミナー
2	Academic English Literacy	社会文化入門	健康・スポーツ科学実習基礎		知識システム入門
3	人文情報学		情報基礎		
4	文学入門	中国語初級		中国語初級	
5					

これは1年生の第1クォーターの時間割です。選択科目は、1年生の11月頃の専修決定に向けて、入門系の授業を多く取りました。入門の授業では、15の専修に属する先生方がオムニバス形式で授業をして下さるので、文学部で何をするかはまだ定まっていない人にとってもおすすめです。

## ある1日の過ごし方

8:00 起床。この日は2限からなので少し遅めに起きます。私は下宿しているのですが、自宅から通う人はもう少し早く起きなければなりません。

10:00 家を出発。大学までバスを使うこともありますが、運動不足解消のため、最近は30分程頑張って歩いていきます。

10:40 鶴甲第一キャンパス(鶴一)でAcademic English Literacyの授業を受けます。私のクラスは対面授業が2週間に1回なので、授業のない日午前は実習のみです!

12:10 鶴一の食堂で昼ご飯を食べます。この食堂は大学の中で一番大きい食堂です。ですがその分も多いので、友達と楽しく喋りながら行列に並びます。私は毎日食堂を利用しますが、メニューが豊富な上、日替わりなので飽きずに楽しめています。

13:20 3限の人文情報学はオンデマンド授業なので、図書館に移動して映像授業を受けてから課題をします。Word等のソフトの使い方を学びます。この時間は眠くなるので、15分程度寝ることもしばしばあります(笑)

4限は文学部校舎で行われるので、課題が終わった次第六甲台第二キャンパスに徒歩で移動します。15分弱歩きます。

15:10 4限の文学入門を受けます。この授業は先ほど述べた入門系の授業の1つで、英米文学、ドイツ文学、フランス文学、国文学、中国文学の専修の先生方が交代で授業をして下さります。

16:40 授業が終わると、その後の予定(友達のご飯やバイト等)が無い日は図書館に行って課題をしたり、読書をしったりします。神戸大学には多くの図書館がありますが、私は自然科学系図書館がお気に入りです。とても綺麗なお洒落なタイプの座席があるため、静かに一人で勉強する時にも、友達と喋りながら勉強する時にもピッタリな場所です。

20:00 お腹が空き次第帰宅します。夜ご飯を食べ、家事をしてから自由時間です。Amazon prime でアニメや映画を見たりしています。

24:00 就寝。

受験生の頃は、朝6時に家を出て、高校、予備校に行って、家に帰ると10時という多忙なスケジュールを送っていたため、大学が始まった当初は、まだサークルも始まっておらず、バイトもしていなかったので、「こんなに寝られて、自由時間が多くて、課題も少ないなんて…もはや何をすればいいんだ!」と早くもモラトリアムを持って余っていました。受験の反動でぐうたら生活を楽しんでいた節もありますが(笑)

しかし、1か月もするとそんな自分に嫌気が差し、自分はこの4年間で何をすべきか、そのために今どう動かなければならないのかを考えるようになりました。受験生の皆さんは目の前の試験の事で頭がいっぱいだと思います。今はそれでいいのですが、受験はゴールではなく、あくまで「通過点」だと私は思います。そして、通過点を乗り越えた先に待つ大学生活は、人生の幅を広げるための、または自分の目標に少しでも近づくためのモラトリアム期間です。己の向上のためにたっぷり時間を捧げることが出来ます。私の場合は、人脈を広げるためにサークル活動やバイトをし、将来の選択肢を増やすために英語や資格の勉強に取り組み、文学部で様々な授業を取ろうと意気込んでいます。

神戸大学文学部は、私のように視野を広げようとする人にも、やりたい事を追求したい人にもぴったりの場所です。一年生の時には入門の授業で様々な専修に広く触れることが出来る上に、○○学導入演習といった、二年生以降にする専修の授業を少し専門的に体験してみる授業もあります。二年生から属する専修は少人数制であるため、教授や他の生徒と深く関わりながら研究をすることが出来ます。是非、受験という通過点を乗り越え、この山の上のキャンパスで共に文学部ライフを送りましょう!

## 先輩の足跡! 学部時代の思い出、あれこれ



田上 絢萌  
TANOUE Ayame  
2022年3月卒業  
私立四天寺中学校  
常勤講師

皆さんは大学で何をしたいと考えていますか?私の大学での目標は「視野を広げる」ことでした。そして神戸大学文学部は私のそんな思いに120%応えてくれました。

私はそもそも心理学や農学にも興味があり、それらの学問と教員免許取得が両立できる学校として神戸大学を選んではいいたのですが、自分が少数派であるとは思っていたので、ある程度交渉が必要になるだろうと思っていました。しかし、文学部はなんと他の学部の授業も全て卒業単位数に含めており、同級生でも同じく他学部に授業を取りに行く人が少なからずいたのです!おかげで何故か文学部で農場経営や、四次元空間について話し合うことができました。また、文学部内でも当然のように国文学の友人が英米文学や哲学などの授業をとり、社会学の友人が国語学の授業をとるなど他専修の人と交流する機会も多くあったため、互いの研究対象について違う視点からの意見を交換することもしばしばありました。実は、私は常にアルバイトと部活に忙殺されており、定まった勉強の時間を

取れませんでした。しかし、昼食時や通学路での友人との会話のおかげで気づきやひらめきを得ることができ、中身の詰まった学問をすることができたのではないかと思います。

このような会話を楽める友人、授業が多い教職課程を励まし合い乗り切った仲間たち、そして全てを諦めない私を優しく見守りつつ、思考を高みへと導いてくださった教授の方々とお出会えたことは本当に幸せで、4年と思えないほど大幅に成長できた貴重な期間だったと思います。また、大学が山の上にあるというのも、初めはデメリットに思われるかもしれませんが、友達と文句も含め様々な話をしながら足を動かし、景色を楽しむことでストレスは軽減されます。さらに物理的にも広い視野をもつことで、気分が落ち込んでも自分の幅なんて小さなことだと思えて、以前よりも物事を大きく捉え取捨選択をすることが上手になった気がしました。それに何よりとてもいい思い出になりますよ!

是非皆さんも、神戸大学文学部で広い世界を体感してみてください!

# LIT

Faculty of Letters,  
Kobe University 2024

文学部への好奇心をアップする情報紙

神戸大学文学部ホームページ

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/>



## KOJSPの 10年と1年

10 years and 1 year of KOJSP

2010年に文学部・人文学研究科に着任してから、早いもので10年以上が過ぎた。一つの学年が入学してから卒業するまでを3回分(高校生なら4回分)繰り返したことになる。この間、定年や移籍で約半数の同僚が離れ、新しい同僚が加わった。かなりの新陳代謝があったものの、面白いことに、文学部の雰囲気はさほど大きくは変わっていないように感じる。それは、KOJSPについても言える。

着任して間もない2012年10月に、神戸オックスフォード日本語プログラム(Kobe-Oxford Japanese Studies Program: KOJSP)がスタートした。オックスフォード大学東洋学部(現アジア中東学部)の日本学科2年生全員を1年間、神戸大学文学部に受け入れ教育するこのユニークなプログラムは、昨年10周年を迎え、12月に記念イベントが催された(この8月に11期が終了する)。筆者は7期ほどプログラムに関わって来た。ここでは、KOJSPの10周年を振り返りつつ、日々(1年)の活動、新たな試み、今後について紹介したい。

KOJSPは2本の柱から成る。一つは名称にもある「日本学」であり、もう一つは「日本語教育」である。日本語を習得しながら日本学を学び、日本研究を進めながら日本語を身につけるというものである。この柱は開始当初から変わることがない。

まず、日本学に関して述べると、オックスフォード生は、アニメ、映画、歴史、芸術、文学、言語など、日本に関するじつに多様な対象をきっかけとして大学に入学している。当然のことながら、それらは「きっかけ」であり、多くの学生と同様、関心は在学中に変化することが多い。





彼らの日本学への関心の変化に、KOJSPは大きな役割を担って来た。学生は文学部15専修の専門科目を一定数履修することが定められ、1人に対し指導教員1名、研究指導教員1名という体制がとられている。これらを通してKOJSP生は自身のテーマを発見し専門性を高めている。

もう一つの柱、日本語教育については、月～金曜の午前2コマが日本語の授業に充てられている。これは日本語予備教育課程を持つ多くの大学の方式と共通し、週10コマを1年間継続することで、学生の日本語能力が飛躍的に向上する。じっさい、修了生は格段に日本語能力を伸ばし、そのこともKOJSPが長く続く理由となっている。

上記の成果が、毎年8月開催の修了発表会で披露され、その後論文集として公刊される。修了発表会を目指し、プログラム後半期は、KOJSP演習と称するゼミが開講され、KOJSP担当教員を始めとする教員から指導を受ける。特筆すべきは、KOJSPで取り組んだ研究テーマを卒業論文に発展させる学生が多いうことである。また、卒業後に日本に就職・進学で戻ってくる学生も一定数いることも特徴的である。彼らの人生に本プログラムが、神戸を離れた後も継続して、多大な影響を与えていることを示している。

オックスフォード大学はカレッジ内に学生が居住するという独自のシステムをとっている。このため文学部はKOJSP生の留学生活全般（受入、居住、課外活動など）に対し責任を持つ。各々の事柄を決め進めるために、各役割を担う教職員10数名によりアドバイザーボードが組織され、月1回運営会議を行っている。KOJSP生に対し1名ずつ配置されサポートする学生チューターも別欄にある通り重要な役割を担っており、修了後も交流が続くことが多い。こうした日々の一つ一つの事柄の積み重ねによって、本プログラムが継続してきた。修了生は110名を超え、関わった教職員は100名を超える。大くのエネルギーが要るプログラムである。

新しい試みについて紹介したい。今年度から、島津製作所との間に業務協定が締結された。学術講演会の開催、オックスフォードからの研究者招聘、日本学教材

の作成、インターンシップ派遣など、KOJSPの活動を充実させるいくつかの新しい事業が企画されている。インターンシップについては、日本航空、福市（Love & Sense）も受け入れ先として派遣が始まろうとしている。

KOJSPと並行して、オックスフォード大学と共同で研究イベントを継続的に企画、開催していることも強調したい。最近では、昨年8月にビャーク・フレレスピック教授（言語学）を招聘し、神戸オックスフォード言語学コロキウム「日本語研究の最前線3」を開催した。また、今年3月には同大学ハートフォード校にて、Oxford Kobe Japanese Linguistics Symposiumを共催し、筆者を含む教員4名が現地で研究発表を行った。この夏にはジェイムス・ルイス准教授（日朝史）を招聘し、イベントを企画中である。これらは、個人の尽力をきっかけにして始まり、その個人が離れた後も、新たな工夫とともに受け継がれている。両者の信頼関係を抜きにしては、実現することも継続することも不可能である。

冒頭で触れた通り、人の入れ替わりはあれども、組織の空気感は保たれることが多い。教壇に立って感じるのは、神戸大学文学部の雰囲気は、時を経ても変わらぬ部分が残っているということである。他大学の文学部とも、また、神戸大学の他学部とも異なる、独自の空気が宿っているように感じるが、それはKOJSPに関しても同様である。日本学・日本語に興味を持ったオックスフォード大学日本学科生の気質と、神大文学部のそれとが結ばれた独自の空気が、プログラム開始直後から育まれていると思う。私たちはそれらに愛着を抱きながら（慌ただしさに時折ばやきつつも）携わっている。

この冊子を読んでいる高校生のみならず、ぜひ神大文学部生になって、この学部とKOJSPを直接感じていただければと思う。



KOJSPアドバイザーボード長  
言語学専修  
田中 真一

## ② 文学部の授業科目 ―「四年一貫で学ぶ人文学の多様な拡がり」

文学部の学生が4年間に学ぶ授業科目は、全学共通授業科目と文学部の専門科目とに分けることができます。全学共通授業科目は、教養科目、外国語科目、健康・スポーツ科学などで構成されています。文学部の専門科目は、基礎科目、自由選択科目、卒業論文関連科目、卒業論文からなります。下の図に履修に関する学年ごとの大まかな流れを示します。

1年	2年	3年	4年
基礎教養科目 総合教養科目	基礎教養科目 総合教養科目	高度教養科目	高度教養科目
外国語科目	外国語科目	専門科目	専門科目
健康・スポーツ科学			卒業論文
専門科目 (基礎科目)	専門科目		

## ① 専修の決定 ―「よく考えて自分の専門を決めることができる」

文学部には、哲学、文学、史学、知識システム、社会文化という5講座に15の専修があります。1年次の11月末頃に専修を決め、2年生からそれぞれの専修に所属することになります。自分は文学部でなにを研究したいのか、じっくり考えてから選ぶことができます。そのために、各講座ごとのガイダンスとも言える「入門」、人文学への導入をはかる「人文学導入演習」、そして各専修での研究の基礎を身につける「人文学基礎」など、学生の興味・関心に応じて選択できるように、いくつかの内容に分けて1年生向けの授業が複数開講されています。これらを参考に、自分が進む専門を決定します。

## LET Message Box

神戸での留学は私にとって2回目の長期滞在なので、日本の日常生活は全く新しいものではありません。それでも、今の経験は、前回とは大きく異なっています。特にドイツの大学で2年間日本語を勉強した後、日本で日本語を上達させ、日本文化についてより深く学ぶことを目的として、こちらに留学しようと思いました。

神戸大学では日本語の授業だけでなく、文学部での日本文化や言語学に関する授業も受講しています。ドイツの大学と比べると、授業の内容や教え方が異なることが多いので、興味のあるテーマについて研究を深めやすくなっています。そして、日本人学生や他の留学生と交流する機会がとて多いです。授業や学部のイベントは大いに役立ち、学習と交流の機会をたくさん与えてくれます。

また、ワンダーフォーゲル部に入部し、



Lea Cabrera Velazquez  
交換留学生(ドイツ)

私は今まで3人の留学生のチューターをしてきました。留学生の区役所での手続きを手伝ったり、日本語の質問に答えたり、生活のサポートなどをしてきました。いくら普段の会話に支障がない語学力があっても、留学生にとっては役所の書類や、職員さんの説明は難しいようでした。そのため、内容をわかりやすく説明する必要がありました。また、留学生と食事をしたり、買い物をしたり、観光地に行ったりと、一緒に留学生活を楽しむこともありました。留学生は色々なものに興味を持って質問してきました。例えば、買い物中に卵焼き用のフライパンを見て「この四角いのは何?」と聞いてきました。私は確かに1つの料理用の調理器具があるのは不思議だと思いました。

私は留学生のチューター活動を通して、うまく伝え、しっかり理解するというコミュニケーションの重要性を感じました。しかしそれ以上に、お互いの文化によって理解を深めることができる交流が楽しかったです。これからもたくさんの学生が留学生との交流を深め、たくさんの発見をしてくれたらと思います。



安下 尚吾  
留学生チューター

## 世界に人間はいるか

文学部での学びの特徴のひとつは「人間がいる世界」への関心にあります。と、この一文を見て、世界に人間がいるのは当たり前と思っただけの高校生の読者の皆さん、もしかすると文学部向きかもしれません。というのも、ことはどうやら必ずしも自明ではないようなのです。私の学生時代の思い出をひとつ。理学部の友人――彼も今では国立大の教員をしています――との会話で、今でも鮮烈に覚えている言があります。私のやりたい学問には、彼いわく「人間がいる」。いっぽう物理を専攻する彼にとっては、それはノイズのようなもので、人間がいなくても世界はよく理解できるはずだと言っています。もちろん今となれば、物理学における観測者効果のことや、詩人ゲーテの自然科学（私の専門のひとつ）のことなど、もろもろ考えないではありません。それでも彼の主張はそれなりに正鵠を得ていたと今でも思います。人文学では、たとえ方法として資料や数値やデータを使おうと、最後のところについて、個別的で具体的な生きた人間が、手触りのある顔や声をもった――あるいは顔や声を剝奪された――人間がいるのです。ゆえに、そこには唯一絶対の正解はありません。ノイズこそ大歓迎。数千年前から続く、人間という美しくも恐ろしい無限の謎へのあくなき興味と関心こそ、文学部のさまざまな専門分野の通奏低音だと言えるでしょう。

◎今回お話しくださった先生  
久山 雄甫 准教授（ドイツ文学専修）



ンやメタバースが実現しつつある時代です。人間とは何か、生きるとは何か、私たちはどこへ行きたいのか、私たちは何を愛したいのか、これほど切実かつ大規模に問われたことは有史以来おそらくありません。テクノロジーの進展だけではありません。世界各地でのコンフリクトは混迷をきわめ、歴史文化の忘却と画一化はすみ、世界観や価値観をめぐる他者との対話もまったくもって不十分です。今こそ、人文学がやるべきこと、文学部で学ぶべきことは、山のようにあるのです。現代文明の悲劇の多くは人間に由来するものでしょう。それでも私はわずかな希望をも、やはり人間に見たいと思っています。そうした思考の土台となるのが「人間がいる世界」を連綿と考えつづけてきた人文学です。神戸大の文学部には一五の専修があります。どの扉をたたいても、ひときわ魅力的な人間の謎が見つかるでしょう。偶然か必然か、このパンフレットを手にとってくださった皆さん、神戸でいっしょに「人間がいる世界」を考えてみませんか。最も古くて最も新しい学問が、皆さんを待っています。

●**教養科目** 教養科目には、原則として1・2年次に履修する基礎教養科目と総合教養科目、3・4年次に履修する高度教養科目があります。人文学科だけでなく社会科学や自然科学についても幅広く現代の教養として身につけ、他分野にまたがる課題を考え協働して解決する力を養います。文学部で人文学の研究を進める上でも、しっかりと学んでおく必要があります。

●**外国語科目** 外国語科目は、「外国語1」として英語を、「外国語II」として、ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語のなかからひとつを選び、合わせて2か国語を学びます。文学部ではこの他に、韓国語、イタリア語、西洋古典語（古代ギリシア語とラテン語）の授業も開講されていますが、専門次第で学生はさまざまな言語を独学します。人文学を学ぶ者にとって外国語の習得は必要不可欠です。

●**基礎科目** 基礎科目は、人文学の基礎を学び、専門科目での学修を豊かなものにするための準備を行う科目です。専修決定後は、それぞれの専門を深く研究することになりますが、教養科目や基礎科目は、そのための礎石であり、自分の専門研究に広がりを与えてくれるものです。基礎科目には、各講座の入門、人文学導入演習、人文学基礎などがあります。また、大学生として自立的な学びを促すため、初年次セミナーが用意されています。

●**専門科目** 専門科目は、専門的な講義、演習、実習などからなります。単位制度に基づく大学の授業は、必修科目と選択科目の取得単位数がそれぞれ決められています。必修科目は必ず履修しなければなりません。選択科目は一

定の範囲内から自由に選択できますが、それらは講座ごとに細かく指定されていますので、注意が必要です。また、ひとつひとつの授業の学習を徹底するために、1年間で履修登録できる単位数には上限が定められています。したがって、履修にあたっては、入学後に配布される学生便覧やガイダンスでの説明に従い、各学期の始めに、どの授業を取りたいか、受けなければならないかを十分に考えて、計画的に登録してください。

## ③ 講義と演習 ―「徹底した少人数教育と課題探究能力の開発」

文学部で高い割合を占める授業科目が、特定のテーマを探究する「特殊講義」と、数人から十数人で行う「演習」、いわゆるゼミです。実験やフィールドワークを含む「実習」も同じく少人数で行われます。中でも、文献や資料を講読したり、自分で選んだテーマについて研究報告を行い、受講者で議論を戦わせたります「演習」は、専門分野の研究手法や考え方を習得し、自ら課題を発見し解決する能力を鍛えるうえで大変重要です。

## ④ 卒業論文

卒業論文は、文学部4年間の学習と研究の結晶です。自分で研究テーマを決め、指導を受けながら、論文作成のための調査や分析も自力で行ないます。これまでに挙げた授業科目から必要な単位数を取得した上で、原則として20,000字（400字詰め原稿用紙で50枚）程度の卒業論文を作成し、口述試験（口頭試問）に合格すれば、卒業となります。